

スポーツ狂人生

敏生と兄永生。趣味は違うが「凝る」ところは共通していた。兄は大の映画ファン。見る映画は年間百本以上。見るだけでなく、評論も書けば点数も付ける。敏生はスポーツファン。体力と技能を競うものなら何でも。凝り方も半端じゃない。スポーツ通をひそかに自慢していた。

中学校時代。台湾には全国規模のスポーツ大会はほとんどなかった。戦後の貧しい時期だったから、政府も、一般の娯楽までは手が回らなかったようだ。そこでスポーツといえば、金のかからない球技が主体。中でも敏生がもっとも愛したのはバスケットボールである。当時のチームといえば鉄道チームや陸海空軍の各チーム。選手の名前は今でも覚えている。

バスケットは、見るだけでなく自分でもやった。夏休みなどは毎朝五時起きで、クラスメイトと二時間もプレイに興じ、のどが渇くと、中央市場に行って西瓜を買った。

建国中学は当時、スポーツでも全土に名が轟いていた。バスケットはチャンピオン。黒シャツ隊と呼ばれたラグビーチームは三十八年間連続優勝で向かうところ敵なし。サッカーチームは社会人大会でも準優勝をさらったほどだ。敏生は母校のこんな活躍ぶりに鼻が高かった。

高校二年の時。化学の追試をひかえていたのに、敏生は教科書持参でバスケットコートへ。化学式を暗記しながらの観戦になった。落第すれば殴られるが、勝負の行方はもっと気になったのである。バスケットに負けず劣らず、野球の方でも「狂」の付くファンだった。

一年一度の南北対抗試合は、自転車の上に立って観戦した。人ごみの中で何度も倒されるが、敏生

はめげない。野球に打ち込む彼の情熱を遮るものはなかったのである。小遣いが残っていればキャンデーを買う。キャンデーを食べながら見る試合は、最高に贅沢な気分だった。

一九五二年のオリンピックはヘルシンキ大会。開会は七月末。運悪く八月には大学受験をひかえていたが、この世紀のイベントをあきらめきれぬ敏生ではない。地球の裏表、日本の短波を通じて真夜中にフィンランドから伝えられる実況放送を、真空管ラジオで聞くのが、受験前の日課になった。とはいえ両親に知られたら大目玉。あの七月の熱暑の中ふとんをかぶって、雑音まじりのか細い実況放送を全身汗まみれで聞いた。

「入学試験にオリンピックの問題が出ていたら。」と敏生はくやしがる。第一志願の医科合格は間違いない。なにしる、どの国の選手がどの種目で何位になったかまで、諳んじていたのだから。

大学一年の時、法科のバスケットチームに入った。観戦ではプロはだしの敏生も、残念ながら実践の方は遊びの域を出なかった。

大学二年の時、フィリピンの陸上チームが台湾に遠征してきた。師範大学で行われた競技は本格的なもので、種目ごとに勝ったチームの国家が流れた。何度も聞かされたので競技が終わる頃には、フィリピンの国家が歌えるようになってしまった。後日、アジア弁理士協会の会議の席上、一節披露してフィリピンの弁理士を驚かせたことがある。まったく何が役に立つかわからない。

卒業謝恩会では、彭明敏教授と一時間あまり野球の話をしたこともある。

スポーツ事情では誰にも負けなかつた敏生にも、かなわぬ男がいる。年は三つ上だが台大医科の同窓・郭世一は、『中華日報』のスポーツコラムを担当していたこともある筋金入のスポーツ通。

尉官候補生時代に知り合った二人は意気投合。操練が終わるとさっそく、一九五六年メルボルン大会について語り合った。

弁護士になって忙しくなってから、スポーツ熱は冷めなかった。日本のプロ野球放送は每晚六時から。ジャイアンツファンの彼には聞き逃せない番組だったが、時に弁護の依頼人が自宅に押しかける。ファイルは読んだか、勝訴はできるかと、しつこく聞いてくるものだから、「裁判官でもないのにそんなこと知るか。」と怒鳴ってしまったことがある。あとで母親から、「あなたは弁護士なんだから依頼人にはもっと親切に。」と諭される始末であった。

一九五八年、楊伝広がアジア大会で十種競技のチャンピオンになった時、二年後のローマオリンピックで金メダルが取れるかどうか気になっていた敏生は、彼が『タイム』の表紙に載ったことを知って、今まで一度も買ったことのないこの雑誌をいそいそと買いに行った。『タイム』はそれ以後、スポーツ情報のニュースソースの一つとして、敏生の愛読書の一つになる。ボクシング重量級チャンピオン・モハメドアリのことも、『タイム』で詳しく知った。

こうして貪欲に積み重ねたスポーツの知識と、日・英・中三ヶ国語の造詣は、敏生の将来の事業と国際舞台へのデビューに、大きな役割を果たすことになる。